

開設	国際関係学部国際関係学科
科目ナンバー	ID311
講義コード	11C000500
講義名	経済政策論
担当者名	江川 美紀夫
開講情報	
単位数	2
受講可能学部	B/E/I/C
備考	

科目の趣旨	本科目では、不況、失業、分配の不平等、社会保障の不備、国際収支の不均衡など、さまざまな経済問題の解決を目指す経済政策論を学習する。経済政策論では、経済成長、完全雇用、物価安定、分配の公正、国際収支の改善、生活環境の改善などの諸目的を達成するため、マクロ経済学の分析枠組みに基盤をおくマクロ経済政策と、ミクロ経済学の分析枠組みに基盤をおくミクロ経済政策とを、いかに利用するかを考える。また、経済政策論の基礎は経済理論であるが、経済社会の制度面の理解も重要である。
授業の内容	1980年代以降、経済政策論において世界の主流を形成してきたのは、新自由主義(=新古典派経済学)である。この新自由主義の経済政策論を、これに対抗するケインズ主義の立場から批判的に検討するのが、本講義の趣旨である。まず新自由主義(=新古典派経済学)とケインズ主義、双方の理論を学ぶ。その上で、先述のような趣旨の下、平成以降の日本経済の長期停滞について、その要因やそれを脱却するための政策論を論じる。
科目の到達目標(理解のレベル)	1. 新自由主義(=新古典派経済学)とケインズ主義、双方の理論及び政策論について基本的な理解を得る。 2. 新自由主義(=新古典派経済学)の問題点について理解する。 3. 平成以降の日本経済の長期停滞について、ケインズ経済学に基づき、その要因を理解し、併せてあるべき政策論を理解する。
授業形態	講義
授業方法	講義形式で行う。
授業計画	<p>第1回 はじめに</p> <p>第2回 混合経済体制 市場経済の長所と短所、政府活動の長所と短所を概説し、今日の経済体制の主流である混合経済体制について論じる。</p> <p>第3回 経済政策思想の変遷 市場経済と政府活動との相克と補完とをテーマとして、18世紀以降の経済政策思想の歴史を概観する。</p> <p>第4回 新古典派経済学 現代経済学の中心に位置する新古典派経済学について、その概略を解説する。</p> <p>第5回 ケインズの経済学Ⅰ ケインズによる新古典派への批判を説明したうえで、ケインズ理論の柱である有効需要の原理について論じる。</p> <p>第6回 ケインズ経済学Ⅱ 有効需要の原理に基づき、市場経済の不安定性、総需要管理政策、乗数理論などを説明する。</p> <p>第7回 1970年代の新自由主義の台頭 新古典派経済学の復権とも言える1970年代における新自由主義台頭の要因について、新自由主義によるケインズ経済学への批判と共に説明する。</p> <p>第8回 日本経済の長期停滞 1980年代以降の日本経済の長期停滞について、各種の統計データによって説明する。</p> <p>第9回 日本経済の長期停滞の原因—新古典派経済学の誤り 新古典派経済学の支配が、日本経済の長期停滞の原因であることを説明する。すなわち「構造改革論」を批判する。</p> <p>第10回 金融政策の基礎知識 マネタリーベースとマネーストック、準備預金制度、信用創造、オペレーション、コール市場、伝統的金融政策と非伝統的金融政策など、金融政策の基礎知識を説明する。</p> <p>第11回 アベノミクスの誤り 前回の学習に基づき、金融政策を偏重したアベノミクスを批判的に検討する。そして結局のところアベノミクスとは、新古典派的政策でしかなかったことを論じる。</p> <p>第12回 財政政策の基礎知識、日本の財政赤字問題 まず資源配分・所得再分配、マクロ経済の安定化という財政の三つの機能を論じる。次に、日本の中央政府歳出と歳入の内訳を概観する。そのあと、日本の財政赤字問題についてその通説を説明する。</p> <p>第13回 日本の巨額の財政赤字は本当に問題か—財政赤字の正しい理解 今日通説となっている日本の「財政危機説」の誤りを論じる。</p>
事前・事後学修	講義において紹介する参考文献を、事前にまた事後において、よく読み込むこと。 現実の経済問題に興味を持ち、講義内容との関連を考えること。

	<p>経済を深く理解するためには、用語や理論など基礎知識の習得とともに、歴史的な考察が大切である。この心がけをもって学習すること。</p>
成績評価方法・基準	<p>以下の点を評価基準として、試験(100%)を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 新自由主義(=新古典派経済学)とケインズ主義、双方の理論及び政策論について基本的な理解を得る。 2. 新自由主義(=新古典派経済学)の問題点について理解する。 3. 平成以降の日本経済の長期停滞について、ケインズ経済学に基づき、その要因を理解し、併せてあるべき政策論を理解する。
教科書・指定図書	<p>教科書は用いない。 適宜レジュメ・資料を配付する。</p> <p>以下を参考文献とする。 伊東光晴『ケインズ』岩波新書、1962年。 江川美紀夫『日本型経済システム—市場主義への批判』学文社、2008年。 島原原志『MMTとは何か—日本を救う反緊縮理論』角川新書、2019年。 中野剛志『レジーム・チェンジ』NHK出版新書、2012年。 中野剛志『奇跡の経済教室[基礎理論編]』KKベストセラーズ、2019年。 藤井聡『10%消費税が日本経済を破壊する』晶文社、2018年。 藤井聡『令和日本・再生計画』小学館新書、2019年。 山家悠紀夫『日本経済30年史』岩波新書、2019年。</p>
履修上の留意点	<p>経済学の基礎について、講義のなかで適宜補うが、できるだけ各自で学習しておくこと。</p> <p>1年次の「経済学概論」を履修していることが望ましい。</p> <p>受講者制限はない。</p>
更新日	2022/3/16

開設	国際関係学部国際関係学科
科目ナンバー	ID322
講義コード	11C000600
講義名	国際マーケティング論
担当者名	金 炯中
開講情報	
単位数	2
受講可能学部	B/E/L/I/C
備考	

科目の趣旨	<p>本科目は、生産販売拠点を複数国に配置し規模の経済と現地適応のバランスをはかる多国籍企業で行われている国際マーケティングを対象とする。社会文化・所得水準の異なる各地域の顧客が求める真のニーズを探求し、合致した製品と価値を創造し、なおかつ受け入れられる価格で提供することによりグローバル市場で競争優位を確立するマーケティングの考え方や戦略の展開について教授し、さらに競争優位の持続化に向けて取り組まなければならない課題について考察する。</p>
授業の内容	<p>グローバル化が深化している今日において、企業活動をグローバルな視点から把握することは非常に重要である。市場のグローバル化が加速するなか、企業の経営活動は国境を越えて様々な形で行われている。近年は、従来の製造企業のみならず、サービスや文化コンテンツ関連企業も海外に進出し、現地市場獲得のため、マーケティング活動を進めている。本授業では、企業の国際マーケティング活動にかかわる様々な事例を用い、国際マーケティングの基礎概念について学ぶと共に、多様な企業及び市場のグローバル化現状に触れながら、国際マーケティングの中心となる戦略について学習する。</p>
科目の到達目標 (理解のレベル)	<p>本授業の主な到達目標は、以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国際マーケティングに関連する基礎的概念について説明できる。 2. 企業及び市場のグローバル化に対する現状を多角的な視点から説明できる。 3. 多様な国籍及び産業に属する企業の国際的事業活動の特徴について説明できる。 4. マーケティング活動が国境を越える際に考慮しなければならない国際マーケティングの諸問題について分析できる。
授業形態	講義
授業方法	<p>本授業は、講義の形式で実施する。授業では補助的ツールとして、manabaを用いる。毎回の授業においては小テスト、あるいはレポート課題をmanabaに提出してもらう。授業では、企業の国際マーケティング活動に関する理論と実際を比較するため、各授業内容に関連する新聞記事や映像資料も活用し、履修者同士でディスカッションを行うこともある。なお、授業内容を考慮し、外部講師を招待して授業(1回予定)を行うこともある。</p>
授業計画	<p>【第1回】ガイダンス: グローバル化とマーケティング 授業の概要説明、グローバル化の4つの次元、国際マーケティングの重要性について理解する。</p> <p>【第2回】国際マーケティングの概念 国際マーケティングの定義や特徴を理解すると共に、発展段階論的アプローチの考え方について学習する。</p> <p>【第3回】国際マーケティングの環境(1) 国際マーケティング活動に影響を及ぼす経済的環境、文化的環境(言語、宗教など)について学ぶ。</p> <p>【第4回】国際マーケティングの環境(2) 国際マーケティング活動に影響を及ぼす法的環境(著作権、特許など)、政治的環境などについて説明する。</p> <p>【第5回】国際マーケティング調査 国際マーケティング調査の実施理由、国際マーケティング調査の方法論及びプロセスについて学ぶ。</p> <p>【第6回】国際市場細分化戦略 国際市場細分化の重要性、国際市場細分化の基準、国際市場細分化の3つのシナリオについて理解する。</p> <p>【第7回】国際市場参入戦略 海外市場に進出する際の参入方式(輸出・ライセンス・直接投資など)、参入時期の選択などについて学ぶ。</p> <p>【第8回】国際製品戦略 製品の構成要素、製品の標準化と適応化戦略、標準化・適応化戦略の5つの類型について学習する。</p> <p>【第9回】国際価格戦略 価格設定の領域、国際価格設定の影響を与える諸要因、国際価格設定の類型について理解する。</p> <p>【第10回】国際流通チャネル戦略 流通チャネルの構造、国別に異なる流通構造、国際流通チャネルの選択基準などについて学ぶ。</p> <p>【第11回】国際プロモーション戦略 国際広告と文化、広告の標準化・適応化戦略、グローバル広告のパターンについて学習する。</p> <p>【第12回】グローバル・マーケティング戦略 グローバル・マーケティングの基本構成、プログラム、プロセス、ネットワークについて理解する。</p> <p>【第13回】総括(理解度確認と解説) これまでの内容を総括しながら、解説する</p>
事前・事後学修	<p>毎回manabaに記載する講義資料をダウンロードまたはプリントアウトし、事前に学習すること。また、基礎的な用語に関してはインターネットなどを活用して下調べしておくこと。</p>

	毎回のレポート課題あるいは小テストに備えつつ、授業内容をしっかり理解し、講義ノートなどで要点をまとめておくこと。授業で解説した理論や事例と関連する実例(新聞・雑誌記事など)を探し、各自解釈・分析してみること。
成績評価方法・基準	本講義の成績は次の基準に基づいて評価する。 毎回の授業内に実施する小テストおよびレポート課題(90%)、そして授業への参加態度(10%)を総合的に評価する。 詳細は、必要に応じて適宜授業内で説明する。
教科書・指定図書	教科書なし。 (参考文献) 金炯中『未来を創造する国際マーケティング戦略論』ミネルヴァ書房、2016年。 三浦俊彦・丸谷雄一郎・犬飼知徳『グローバル・マーケティング戦略』有斐閣アルマ、2017年。
履修上の留意点	毎回manabaを必ず確認すること。
更新日	2022/3/16

開設	国際関係学部国際関係学科
科目ナンバー	ID321
講義コード	11C000700
講義名	多国籍企業論
担当者名	荒井 将志
開講情報	
単位数	2
受講可能学部	B/E/L/I/G
備考	

科目の趣旨	本科目では、実際の国際ビジネスの比較検討を行い、企業国際化の諸問題を解決に導く思考プロセスを養うことを目的とする。海外で事業活動を行う企業には、本国で蓄積したブランドや技術などの経営資源を効率よく進出先国に移転できる能力と、現地の環境に上手く適応できる能力を持つことが求められる。また国際化の進展とともに、複数国に分散した研究開発・生産・販売の各拠点を有機的に結合するグローバル組織を開発する必要性が高まる。本科目ではこうした企業独自の経営資源の国際移転と経営現地化に関わる諸問題を分析する視点についても学ぶ。
授業の内容	私たちの周りの製品に目を向けると、Made in China や Made in Vietnamなどの表示が見られる。今日、企業が国境を超えてモノやサービスを生産し、国境を超えて販売することが当たり前になっている。その理由を考えるためには、多国籍企業を取り巻いている文化、政治、経済環境などの影響を踏まえながら、外国に工場を設置するメリット、文化や習慣の違いへの対応、現地への社会貢献など、本国のみでの経営とは異なる国際的経営について考えてゆかなければならない。本講義では、経営学の基本的な概念から説明をはじめ、企業が国際化を進めていく段階をひとつひとつ説明してゆく。さらに、スマートフォンや化粧品、食品など私たちの身近な製品や企業を事例に挙げ、多国籍企業の経営戦略と競争優位について見てゆき、理解を深めていく。
科目の到達目標 (理解のレベル)	企業の事業展開がなぜ国際的に行われるようになるのかを理解できるようにする。また、多国籍企業がもたらす問題についても理解し、現在のビジネスの世界的な動きがつかめるようになる。さらに、国際ビジネスに対する心構えができ、自分のキャリア選択において前向きになれる。
授業形態	講義
授業方法	授業形態は、パワーポイントによる講義形式である。 授業時には、パワーポイントのスライドを資料として配付する。 毎回の授業の最後にはその日の授業に関する小レポートを課す。 また、現在の多国籍企業のビジネスを深く理解してもらうために、映像資料なども適宜用いる。
授業計画	<p>【第1回】ガイダンス(本講義の概要説明)</p> <p>【第2回】多国籍企業とは何か</p> <p>【第3回】多国籍企業と国際競争優位</p> <p>【第4回】企業はなぜ海外に進出するのか</p> <p>【第5回】主要な多国籍企業の理論(1)</p> <p>【第6回】日本の多国籍企業の国際戦略</p> <p>【第7回】多国籍企業のグローバル戦略</p> <p>【第8回】多国籍企業の異文化経営</p> <p>【第9回】イノベーション・ネットワーク</p> <p>【第10回】技術移転と技術管理</p> <p>【第11回】多国籍企業と現地企業との関係</p> <p>【第12回】BRICsと多国籍企業</p> <p>【第13回】多国籍企業とBOP市場戦略</p> <p>※その時々トピックも取り上げるため、講義の順番や内容が変わることがあります。</p>
事前・事後学修	事前・事後学修の指示は、履修登録完了後にmanabaを通じて履修者に対して行う。各自が確認し、しっかり取り組み、分からないことがある場合はメールで問い合わせること。
成績評価方法・基準	試験80%、平常点20%で評価する。 なお、平常点は、授業時の小レポートの内容により評価する。
教科書・指定図書	教科書:特に指定しない。 毎回資料を配布する。 指定図書:各回、そのテーマに合った参考文献を紹介する。

履修上の留意点	詳細は、初回の授業時に説明するので、1回目の授業には出席すること。
更新日	2022/3/16

開設	国際関係学部国際関係学科
科目ナンバー	IE221
講義コード	11D000500
講義名	国際人権法
担当者名	富田 麻理
開講情報	
単位数	2
受講可能学部	B/E/L/I/G
備考	

科目の趣旨	本科目は、20世紀の後半に国際連合により推進された、人権尊重のための国際協力の歴史と現状の理解を目的とする。具体的には、世界人権宣言の採択や人権諸条約の締結、そこで定立された人権規範の内容や、履行状況を監視するための実施措置についても学習を深める。更に人権の主流化が実現したと言われる21世紀において、今後どのような発展が必要とされ、又いかなる課題が残されていて、早急な解決を迫られているのかを検討する。
授業の内容	この講義では、日本を含め、今日の国際社会にどのような人権問題があるのか、その現実を知るとともに、国際人権法、人権を国家(や企業)に守らせるための国際的な制度について学ぶ。また、学生一人一人に人権が実現された社会に一步でも近づくにはどうすればよいのか、解決法について考えてもらうことを目的とする。
科目の到達目標 (理解のレベル)	(1)世界で起こっている国際的な人権問題について知識を得る (2)国際的な人権基準(国際人権法)にはどのようなものがあるのか、その内容は何かを知る (3)国際的な人権制度についての知識を得る (4)具体的な事例についての知識を得る (5)人権問題の解決にどうすれば良いのか考えることができる
授業形態	講義
授業方法	連絡、資料、小テスト等、レポートの提出等はmanabaを通して行う。 講義形式が基本となる。課題に関する学生間のディスカッション、学生による発表も行う。
授業計画	【第1回】講義の概要について。 人権とは何か。国際人権法とはなにか。 課題:人権問題に関するビデオ(youtube)を見て課題を次週までに提出する。 【第2回】 奴隷制 第1回の授業で見たビデオの解説と奴隷制に関する国際法についての講義 【第3回】 世界人権宣言 課題:それぞれの条文に関する課題を次週までに提出する。 【第4回】 世界人権宣言課題の発表 課題:国際人権規約と世界人権宣言の違いに関する課題を次週までに提出する。 【第5回】 国際人権規約(1) 規約の内容 【第6回】 国際人権規約(2) 条約機関 【第7回】 国連憲章に基づいた機関 課題:指定の国に対する勧告について調べる課題を次週までに提出する 【第8回】 子どもの権利 【第9回】ジェンダー 女性の権利、LGBTの権利 【第10回】講演(予定) 課題:講演の要約と感想を次週までに提出する 【第11回】 難民や移動者の人権 課題:難民の認定(プリント)の課題を次週までに提出する 【第12回】日本における人権問題 ハンセン病、女性、先住民族(アイヌ)の人々の人権問題等について 【第13回】まとめ 小テスト
事前・事後学修	必ず指定された教科書の範囲や事前にアップロードされた資料等を読み予習すること。 毎週実施されるクラス内の小テストを受けること。 レポートは期限内に必ず提出すること
成績評価方法・基準	平常点 授業内の小テスト、課題、グループ(もしくは個人)のプレゼンテーション (50%)

	学期末レポート (50%)
教科書・指定図書	<p>【教科書】横田洋三編『新国際人権入門』(法律文化社、2021年) 条約集(いずれの出版社、年度でもOKですが、必ず用意してください)。</p> <p>【参考書】 芹田健太郎、薬師寺公夫、坂元茂樹『ブリッジブック 国際人権法』(信山社、2017年) 阿部浩己・今井直・森本俊明『テキストブック国際人権法(第2版)』(日本評論社、2004年) 申へボン『国際人権法』(信山社、2016年) 尾崎久仁子『国際人権・刑事法概論』(信山社、2004年) 久保田洋『国際人権保障の実施措置』(日本評論社、1993年) 大沼保昭『人権、国家、文明』(筑摩書房、1998年) 畑博行・水上千之『国際人権法概論』(有信堂高文社、1999年) シモニデス『国際人権マニュアル』(明石書店、2004年)など</p>
履修上の留意点	<p>事前にアップロードされた資料をダウンロードし、教科書の指定範囲とともに予習すること。 小テスト、レポートの提出期限を必ず守ること。</p>
更新日	2022/3/16

開設	国際関係学部国際関係学科
科目ナンバー	IE211
講義コード	11D000600
講義名	国際政治学
担当者名	向 和歌奈
開講情報	
単位数	2
受講可能学部	B/E/L/I/G
備考	

科目の趣旨	本講義は、政治学をベースにした国際関係論の中・上級科目である。国際政治学の理論や諸問題(issues)を最先端のところまで、しかも包括的に、採り上げていきたい。入門的な科目と比較した場合、抽象的な概念や理論も学ぶことになる。しかしながら、国際政治学はあくまでも社会科学に属するひとつの「学問」であって、時事問題の単なる集積ではない。したがって、相対論や量子力学等のない物理学などあり得ないのと同じように、いわゆる「パラダイム」(クーン)のない国際政治学もあり得ないのである。以上の点に、本講義の趣旨がある。
授業の内容	国際政治学とはなにか。なぜ国際政治学を学ぶ必要があるのだろうか。国際政治は我々が生きる世界そのものである。過去から現在に及ぶ世界に点在するさまざまな課題を理解することは、現在そして未来を担う人材には不可欠な作業でもある。本授業はそのような考えをもとに、本授業では、毎回特定のトピックを軸にしつつ、国際政治の理論、時代の流れ、そして主要な課題の整理など、さまざまな切り口から国際政治について検討するとともに、それらを活用して時事問題を正確に理解し思考する能力を養い、国際政治を学ぶことと世界情勢を理解することがいかに密接に結びついているのかを確認する。 今学期本授業では、パワーポイントを使用した講義形式で授業を行う。授業内で理解が不足した箇所については、受講生自身も適宜リサーチを行い、毎回授業の最後に提示される設問に対する回答への受講生自身の考えを、manabaから提出してもらう予定である。
科目の到達目標 (理解のレベル)	国際政治の理論、時代の流れ、世界に散見される主要な課題について、ニュースなどがより深く正確に理解するための、応用的な知識を身に着ける。 授業で配布される資料をもとに講義を通して授業内容を正しく理解し、また学生自身が授業では補えなかったような部分をリサーチする意欲を養うことで、大学在学中はもちろんのこと、卒業後も自分自身がその一員である国際社会で起こっている、さまざまな事象に興味関心を持ち、理解を続ける力を身につける。
授業形態	講義
授業方法	講義形式での授業を実施する。具体的には、毎回の授業で取り上げるテーマについて、担当教員によるパワーポイントを用いた講義を聴講してもらい、レクチャー終了後に提示する、講義内容に沿った設問について考えてもらうことで、理解度の確認を行う。 授業で使用する資料などは、授業支援システム(manaba)で配布予定である。 レクチャー後に提示する設問への回答は、受講生自身も適宜リサーチを行ったうえで、毎回manabaから提出をしてもらう予定である。設問への回答の提出は、出席確認も兼ねている。
授業計画	第1回目:「オリエンテーション」 内容:国際政治学とはどういった学問なのか。授業を通して何を学ぶのかについて理解する。 第2回:「国際政治学の基礎概念」 内容:国際政治学を修学うえで基礎となる概念について理解する。 第3回:「国際政治の理論(1)現実主義、国際社会論、機能主義、新機能主義、国際的相互依存論」 内容:国際政治の理論のうち、リアリズムとリベラリズムについて理解する。 第4回:「国際政治学の理論(2)国際レジーム論、グローバル・ガバナンス論、デモクラティック・ピース論、コンストラクティビズム、政策決定論」 内容:リベラリズムのさまざまな視点について第4回からの続きで理解を深める。 第5回:「安全保障の概念」 内容:安全保障とはなにか。さまざまな安全保障の概念を概観しつつ理解を深めることを目指す。 第6回:「核兵器と国際政治」 内容:1945年以降、国際政治の中核を担ってきたのが核兵器の存在である。核兵器がなぜ国際政治を動かしてきたのかについて理解する。 第7回:「日本と核兵器」 内容:日本は唯一の被爆国として積極的に核軍縮を主張してきた。他方で、日本はアメリカの核の傘(核抑止)に頼る安全保障政策を遂行する。このような矛盾についての考えを整理し理解する。 第8回:「権力移行と国際関係」 内容:冷戦終結後アメリカによって牽引されてきた国際社会は、中国の急激な台頭により一極支配構造が崩壊し、現在では米中関係に翻弄される構造をとる。このような米中関係がどのように国際政治に影響を及ぼしているのかについて理解する。 第9回:「EUから考える地域主義の現状と課題」 内容:冷戦期より独自の協力体制の構築を目指してきたヨーロッパは、EUの実現により地域主義のひとつの成功例として考えられてきた。他方でイギリスがこのEUからの離脱を決定したことで、ヨーロッパは新たな時代を迎えようとしている。地域主義をEUを事例として考察する。 第10回:「南アジアから考える地域の政治力学」 内容:南アジアに位置するインドとパキスタンは独立後から一貫して対立関係にある。なぜ両国はわかりあえないのだろうか。地域の政治力学が必ずしも地域に限定されない複雑性について南アジアを事例に考える。 第11回:「問題解決の手段を考える:北朝鮮核問題」 内容:国際社会には協調を拒む国家が複数存在する。そのような国家との共存はどのように行っていけばよいのだろうか。北朝鮮を事例にとりつつ、問題解決の手段について理解する。 第12回:「揺らぐ国際政治の未来」 内容:動揺し続ける国際政治について総合的に整理し考える。 第13回:「まとめ」

	<p>授業を通して学んだことを、課題形式で確認する。</p> <p>※ なお、国際情勢の変化に鑑みて、授業内容を場合によっては変更することもある点に、留意すること。また、上記講義中2回程度は外部の専門家による講義も予定。</p>
事前・事後学修	<p>授業中の講義が中心となるが、授業で学ぶ内容は、時間の制限上、限定的になる。そこで、平日頃より新聞を読む習慣を身に着け、世の中で起こっていることを理解し、知見を蓄積していくことが、講義を受ける前提となる。また、参考図書に挙げる文献のみならず、積極的に図書館などを活用して、国際政治に関連する書籍を読むことで、知識を身に付ける。</p> <p>授業後は、授業中に使用した資料への書き込みをいまいちど見直し、必要に応じて補足のためのリサーチを行う。新聞やニュースを通して最新の国際動向を継続的にチェックし、授業の内容と照合してみることも、知見を深めるために役立つ作業となる。</p>
成績評価方法・基準	<p>成績評価は、以下のとおり行う。</p> <p>(1) 授業内課題(授業内に課す課題の内容を点数化して、採点を行う。各回の課題を5点満点として評価し、授業内で行う最終課題を除く12回分の講義での点数を合算する):60%</p> <p>(2) 最終課題(第13回目授業内で実施予定です):40%</p> <p>上記を足し合わせたうえで、100点満点中、90点以上をS、80点以上をA、70点以上をB、60点以上をC、59点以下をDとする。</p>
教科書・指定図書	<p>教科書は指定しない。毎回授業時にmanabaにてその回の資料を配布する。</p> <p>【参考図書】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・村田晃嗣、君塚直隆、石川卓、栗栖薫子、秋山信将『国際政治学をつかむ』有斐閣、2009年。 ・中西寛、石田淳、田所昌幸編『国際政治学』有斐閣、2013年 ・ジョセフ・S・ナイ・ジュニア、デイヴィッド・A・ウェルチ著、田中明彦、村田晃嗣訳『国際紛争:理論と歴史[原書第9版]』有斐閣、2013年。 ・高坂正典『国際政治—恐怖と希望』中公新書、1966年。
履修上の留意点	<p>授業で触れる諸問題について包括的に理解するとともに、重要な用語や概念についての的確に説明ができるようになることは当然ながら、それらを活用して新聞やニュースを読み解く力を養うことを目指すため、「国際政治入門」を履修した「後」に本授業を履修することが望まれる。したがって、同じ学期中に「国際政治入門」と「国際政治学」を履修することは推奨しない。</p>
更新日	2022/3/16

開設	国際関係学部国際関係学科
科目ナンバー	IE322
講義コード	11D000800
講義名	国際機構と法
担当者名	秋月 弘子
開講情報	
単位数	2
受講可能学部	B/E/L/I/G
備考	実務経験のある教員による授業科目である。

科目の趣旨	今日では、国家と同様に国際社会における主要な行為主体として認識される国際機構の重要性を理解させ、国際社会における国際機構の役割、国家と国際機構の関係、国際機構を通しての国際法の発展などを理解させる。カリキュラム体系上では、法学概論→国際法学→紛争解決と国際法、と続く国際法科目の応用科目である。
授業の内容	<p>国際機構の目的、組織、権限などに関する理論、および、安全保障、人権・人道、開発、環境などの各分野における国際機構の活動の実態と、それを支える法について学習する。</p> <p>それにより、国際機構が国際法理論を修正している現状、および、国際法領域の中の国際機構法という新たな法領域とその特徴、などを理解させる。</p> <p>具体的には、国際機構の定義・歴史、国際機構と法の関係、国際機構の設立・組織構造、意思決定手続・予算、国際機構と国家の関係、国際機構の法主体性、国際機構相互の関係、安全保障・平和行動の分野における活動、武力紛争の事例と国連の対応、人権の国際的保障、人道支援、開発援助、さらには、国際機構による国際法の変容について、具体的な事例を取り上げ、考えていく。</p>
科目の到達目標 (理解のレベル)	<p>本講義を履修することにより、学生は、国際機構とは何か、どのような分野においてどのような国際機構が活動しているのかについて、理解することが目的である。</p> <p>学生は、具体的な国際問題に関連する国際法(条約)にはどのようなものがあるのか、その問題に取り組む国際機構にはどのようなものがあるのか、各国はその問題に対して国際法、国際機構を利用してどのように解決しようとしているのか、解決できないとしたら何が問題なのか、を自ら調べ、考え、国際法に照らした一応の判断を出せるようになることが目標である。</p>
授業形態	講義
授業方法	<p>授業支援システム(manaba)で事前に課題や資料を配布する。</p> <p>学生は、配布された資料や指定された教科書を読んだ後、課題に取り組み、提出した上で、授業に参加する。</p> <p>授業は、原則として、対面授業で実施する。</p> <p>授業支援システムはmanaba、出席管理システムはresponを使用する。</p> <p>基本的には講義を中心に授業を進めるが、適宜、視聴覚教材を用いたり、答案の書き方を練習したり、課題や時事問題に関する討論も行う。</p>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義概要説明 (なぜ国際機構について学ぶのか) 2. 国際機構法総論 (国際機構の定義、歴史、国際機構と法) 3. 国際機構と法(1) 国際機構の設立、組織構造 (設立基本条約、三部構成) 4. 国際機構と法(2) 意思決定、予算 (全会一致、コンセンサス、加重表決、拒否権、決議の法的効果) 5. 国際機構と国家の関係 (原加盟国、加盟要件、代表権、権利義務、加盟国の主権と国際機構) 6. 国際機構の法主体性 (国際法主体、国内法主体、ベルナドッテ伯爵殺害事件、国際機構の特権免除) 7. 国際機構相互の関係 (専門機関、連携協定、地域的機関) 8. 安全保障 (国際連盟、戦争の違法化、集団安全保障、集団的自衛権) 9. 平和維持・平和構築 (PKOの原則、平和構築委員会、人間の安全保障、武装解除・動員解除・社会復帰) 10. 武力紛争の事例と国連の対応 (武力行使容認決議、多国籍軍、人道的介入/保護する責任、先制自衛) 11. 人権の国際的保障 (国際人権基準、履行監視制度、人権理事会、普遍的定期的審査(UPR)、人権基盤アプローチ) 人道支援 (難民条約、難民の国際的保護と法的地位、難民問題の恒久的解決、国内避難民) 12. 開発援助(開発援助の形態、持続可能な開発目標 (SDGs)、貸付協定、人間開発) 13. 国際機構と国際法の変容 (国際社会の制度化、国際法と国際機構法)、まとめ
事前・事後学修	<p>事前にmanabaで課題を出すので、各自で教科書、資料等を読み、課題に取り組み、提出した上で、授業に参加すること。</p> <p>課題は、成績評価方法・基準の欄に示す通り、30パーセントを占める。各自しっかり取り組み、分からないことがある場合には、メール等で問い合わせること。</p>

成績評価方法・基準	<p>期末試験:70% 課題の提出状況・内容および平常点(積極的な発言、議論への参加の程度)30%に基づいて、総合的に評価する。</p>
教科書・指定図書	<p>教科書: 渡部茂己・望月康恵編著『国際機構論 総合編』国際書院、2015年。 指定図書: 加藤・植木・森川・真山・酒井・立松編著『ビジュアルテキスト国際法』有斐閣、2017年。 岩沢雄二『国際法』東京大学出版会、2020年。 参考文献: 講義の中で適宜指示する。</p>
履修上の留意点	<p>本講義は、「法学概論」、「国際法入門」、「国際人権法」、「紛争解決と国際法」を履修していることを前提として進める。したがって、これらの科目を未履修の学生は、法学の基礎知識、および、国際法の基礎を身につけるよう、早急に自習すること(参考テキスト:加藤・植木・森川・真山・酒井・立松編著『ビジュアルテキスト国際法』有斐閣、2017年)。</p>
更新日	2022/3/16

開設	国際関係学部国際関係学科
科目ナンバー	IE313
講義コード	11D000900
講義名	比較政治論
担当者名	清水 謙
開講情報	
単位数	2
受講可能学部	B/E/L/I/C
備考	

科目の趣旨	政治学の応用科目であり、戦後の米国において発達した学問分野である。各国の政治体制の特質を概念的に把握するとともに、民主主義体制の定着という重要問題にアプローチする。内容的には、比較政治学の歴史と基本概念の解説、民主主義概念の起源と展開の説明をまず第一とする。更に、先進国における民主政治の諸形態と課題、途上諸国における民主化の起源と課題についての説明を加える。具体的には、1970年代以降に民主化を開始した、南欧、ラテンアメリカ、中東欧、旧ソ連、東アジア諸国を主たる考察対象とする。
授業の内容	本科目は、政治学の応用科目として比較政治を学び、歴史、概念、理論、制度などを理解する。授業では毎回ごとに比較政治学の重要なトピックを扱う。比較政治学は、世界で起こっている様々な政治現象を理解し、それらを説明する上で重要な学問領域であり、本科目では政治現象のメカニズムを解明するための視座を身につける。また、できるだけ多くの国、地域の事情を取り上げながら、世界情勢を体系的に分析する力を養う。 主権国家の成立から講義を始め、民主主義体制と権威主義体制、政党政治と政党システム、選挙、執政府の形態、政軍関係、社会運動、内戦、そしてグローバリゼーションに至るまで、近年のグローバル社会を重層的に理解しながら、我々が生きる21世紀の将来をともに考える。
科目の到達目標 (理解のレベル)	受講生がこの科目で比較政治論に関する重要な概念を理解、説明できるようになることと、そして理論を用いて現象を説明し、自分で問題を分析する切り口を培うことを狙いとする。また、主要国の政治現象を理解する上で重要なテーマを扱うことで、抽象的な理論だけでなく、具体的な事例を分析する着眼点を修得し、複合的視野を持って体系的に説明できるようになることを目指す。それによって、受講者各自が問いを設定し、説明可能な枠組みを作り出すスキルを身につけることを目標とする。
授業形態	講義
授業方法	本授業は講義形式である。オンラインツールを活用する場合は、manabaを利用する予定である。 テーマを身近に感じてもらえるよう、スライドによる図説や写真・映像資料などを用いる。授業では構造的要因や制度的要因、アクターの要因から説明するが、南欧、ラテンアメリカ、中東欧、ロシア(旧ソ連)、東アジア諸国などの事例も取り入れ、できるだけ具体的なイメージをもてるよう各問題の分析の着眼点を形成と発展を促していく。また、適宜、事例で取り上げる国、地域などの歴史、文化の紹介なども行い、構造、制度、アクターの背後にある考え方にも目を配る。
授業計画	<p>【第1回】オリエンテーション: 比較政治学とは何か 授業の進め方、各回の紹介、履修上の注意を行い、比較政治学の定義と方法論を概説する。</p> <p>【第2回】国家の誕生と発展 近代主権国家形成の歴史的背景と、新国家誕生の規定要因を説明する。</p> <p>【第3回】民主化はいかに進むか 民主主義体制の定義、民主化の規定要因、競争的権威主義体制を説明する。事例としてブラジルと旧ユーゴスラヴィアを取り上げる。</p> <p>【第4回】民主主義体制の持続 民主主義体制の定着と持続の規定要因を、経済発展水準、政治文化、社会関係資本に着目しながら説明する。事例としてタイを取り上げる。</p> <p>【第5回】権威主義体制の持続と崩壊 権威主義体制の定義とその類型とともに、権威主義体制の持続と崩壊の規定要因を説明する。事例として中東諸国とシンガポールを取り上げる。</p> <p>【第6回】内戦の発生と終結の規定要因 内戦と「新しい戦争」の特徴を確認し、内戦が国際紛争化する要因と内戦の終結要因について説明する。事例として旧ユーゴスラヴィアなどを取り上げる。</p> <p>【第7回】執政制度の諸相 執政制度の定義と諸類型を確認し、議院内閣制、大統領制、半大統領制を説明する。さらに、近年注目されている「大統領制化」についても説明する。</p> <p>【第8回】政党システムと政党政治 政党の機能と政党組織の諸類型、政党システムの安定と変化について説明する。事例としてヨーロッパを取り上げる。</p> <p>【第9回】政軍関係のモデル 軍の政治的影響力を検討し、軍によるクーデターの発生要因と政軍関係を説明する。事例として、中東やラテンアメリカなどを取り上げる。</p> <p>【第10回】社会運動が動かす政治 社会運動の定義を確認し、社会運動の政治的帰結の規定要因を説明する。事例として世界革命としての「1968年革命」を取り上げる。</p> <p>【第11回】エスニシティ(民族)と政治 エスニシティの定義を確認し、エスニシティ集団の政治化と行動の多様性を説明する。</p> <p>【第12回】民主主義とアカウンタビリティ 民主主義のクオリティを説明し、民主主義におけるアカウンタビリティの重要性について考える。</p> <p>【第13回】新自由主義改革とグローバリゼーション 新自由主義改革が導入されていった背景を説明し、近年急速に進んでいるとされるグローバリゼーションの展開を考える。事例として、中東欧、ロシア(旧ソ連)などを取り上げる。</p>

事前・事後学修	授業に際しては、教科書の文献の読解とともに、授業で扱うテーマに関する事項についても予習しておく。また、各回の事例などを理解してもらうため、日頃から国際ニュースについてもチェックをし、関心を高めておくこと。受講生の関心を可能な限り取り上げたいので、疑問に感じたことや授業で議論したいことを考えておくこと。授業後は、学習した内容を振り返り、レジュメや資料・文献を再読して理解を深めることに努めてほしい。
成績評価方法・基準	成績評価は授業で扱った内容を基にした試験による(100%)。 授業で扱った歴史、概念、理論、制度から事例として取り上げた機構、国、地域の中から出題し、この科目の到達目標(理解レベル)に設定している重要な概念や理論などの理解度を測り、事例を分析する着眼点と説明枠組みの修得度合いを問う。授業での質問や議論などの発言についても付加的な評価をしたい。 なお、学則21条により、授業日数の3分の2を出席しない者は、評価の対象とはしない。出席はresponを用いて管理をする。
教科書・指定図書	(教科書)久保慶一・末近浩太・高橋百合子編『比較政治学の考え方』有斐閣、2016年。
履修上の留意点	他の政治学関連の科目などを履修することを薦める。
更新日	2022/3/16

開設	国際関係学部国際関係学科
科目ナンバ	IE212
講義コード	11D001200
講義名	アメリカの政治と外交
担当者名	伊藤 裕子
開講情報	
単位数	2
受講可能学部	B/E/L/I/C/U
備考	実務経験のある教員による授業科目である。

科目の趣旨	本科目は、今日の国際関係において大きな影響力と発言力を持ち続けるアメリカ合衆国の内政と外交の基本的特質を理解することを目的とする。あわせて国際関係理論モデルの実証的検証にも努める。具体的にはアメリカの政治理念と政治機構の変遷、諸外国への政治・経済・軍事的な関与、国際秩序形成における影響力の行使、さらには国内の政治要因としての民族・宗教・ジェンダー等にも目を配りつつ、国際関係におけるアメリカの存在とそのパワーの盛衰を包括的に理解する。
授業の内容	国際関係の政治・軍事・経済・文化等、様々な分野で絶大な影響力を行使するアメリカを理解することは、国際社会を理解するうえで必須である。本講義では、そうしたアメリカの政治と外交を時系列的に考察する。 まずアメリカの政治理念を理解するために、独立宣言と合衆国憲法を学ぶ。そしてアメリカ的価値観がアメリカの国内政治と外交政策に現れる理念と現実の間のギャップにも着目しつつ、アメリカの民主主義がどのように変容してきたのかを歴史的・重層的に理解する視点を提供する。学期前半においては国内政治、特にアメリカの価値が表出され、あるいは国内の分断が見られるトピックを取り上げる。後半には外交政策に注目し、自由、民主主義、人権といったアメリカの価値観がどのように表出されるのか、そしてそれらの価値観と現実の外交政策との間のギャップがなぜ存在するのかを検証する。
科目の到達目標 (理解のレベル)	アメリカの政治機構と政治理念の発展、アメリカ社会を分断する様々な価値観を学ぶ。また、それらが国内政治と外交政策にどのように表れ、世界の中心的アクターとしてのアメリカ合衆国がどのように国際関係に影響を与えているのかを理解する。 アメリカへの留学を考えている学生は、本講義を履修することによりアメリカへの理解を事前に深めることが可能となる。
授業形態	講義
授業方法	講義形式で行う。パワーポイントを使って解説し、時折オンラインの動画等も利用する。
授業計画	<p>第Ⅰ部 アメリカの政治理念と政治制度</p> <p>【第1回】アメリカの政治理念 アメリカ独立宣言と合衆国憲法に見られる政治理念</p> <p>【第2回】アメリカの政治制度と大統領選挙 アメリカの選挙、議会制度、3権分立といった政治制度、特に異例の事態に陥った2020年大統領選挙の問題点とそのアメリカ民主主義への影響</p> <p>第Ⅱ部 現代アメリカ社会と国内政治－民主主義の在り方を模索して</p> <p>【第3回】ブラック・ライブズ・マターとアメリカの人種差別との闘い 400年に及ぶアメリカ人種差別の歴史と差別撤廃のための戦いの歴史</p> <p>【第4回】歴史と多様性をめぐるアメリカ社会の包摂と分断(1)移民国家アメリカ</p> <p>【第5回】歴史と多様性をめぐるアメリカ社会の包摂と分断(2)ジェンダー、銃問題、民主主義の定義</p> <p>【第6回】前半のまとめと中間テスト</p> <p>第Ⅲ部 現代アメリカの外交関係</p> <p>【第7回】現代国際関係とアメリカのインド・太平洋戦略(1)トランプ・バイデン政権の対中政策</p> <p>【第8回】現代国際関係とアメリカのインド・太平洋戦略(2)オバマ政権からトランプ政権のアメリカ・ファースト主義外交、そしてバイデン政権へ</p> <p>第Ⅳ部 覇権国家アメリカと国際秩序</p> <p>【第9回】覇権国家アメリカと戦後国際秩序の構築－アメリカの帝国主義的膨張と二つの世界大戦</p> <p>【第10回】冷戦と戦後世界秩序(1)冷戦構造の起源とヨーロッパ ヨーロッパにおける冷戦の始まりと進展</p> <p>【第11回】冷戦と戦後世界秩序(2)冷戦の進展とアジア アジアにおける冷戦の拡大状況と朝鮮戦争、ベトナム戦争</p> <p>【第12回】冷戦終結とポスト冷戦期のアメリカ外交</p> <p>【第13回】まとめと授業内テスト</p> <p>上記を予定しているが、適宜時事問題も取り入れて解説することもあるため、変更が生じる可能性もある。</p>
事前・事後学修	【事前学修】 アメリカの政治外交に日ごろから関心を持ち、よく理解しておく。また短い新聞記事、論文、統計資料などを配布するので、必ず事前に読んでおくこと。CNN、New York Times等のアメリカのメディア報道にも関心を持ち、アメリカ現代政治外交の動向を理解しておくこと。

	<p>【事後学修】 テキストと授業を復習し理解を深めておくこと。また小テストを実施しますので、その準備と小テスト実施後の復習も各自でしておくこと。</p>
成績評価方法・基準	学期中に適宜実施する小テストと課題により50%、中間テストと期末テストにより50%を評価する。
教科書・指定図書	教科書は特に指定しない。毎回レジュメ、資料、新聞記事等を配布する。
履修上の留意点	後期3, 4年次科目「外交政策論」の受講を希望する者は、本科目を履修しておくことが望ましい。
更新日	2022/3/16

開設	国際関係学部国際関係学科
科目ナンバー	IF331
講義コード	11E000700
講義名	環境と開発
担当者名	福嶋 崇
開講情報	
単位数	2
受講可能学部	B/E/L/I/C
備考	

科目の趣旨	本科目では、開発途上国における環境問題を講義する。地球環境問題は現代社会において差し迫った課題である。特に開発途上国においては経済開発によって伝統的な生業様式の変容とそれに伴う環境の破壊、劣化が進行している。この科目では学生に開発途上国における環境問題の実状と原因を事例に基づき理解させ、環境問題が社会に与える影響を理解させると共に、持続可能な開発のあり方を考えさせることを目的とする。
授業の内容	この科目では、開発途上国における環境問題を取り扱う。地球環境問題は現代社会において差し迫った課題である。近年の環境問題はグローバル化、越境化、加害者・被害者関係の複雑化などによって特徴付けられるが、開発途上国は多くの地球環境問題において、主たる起因者ではないにも関わらず、その悪影響を甚大に被る被害者でもある。 この科目では気候変動問題、エネルギー問題、森林減少問題、廃棄物問題などを取り上げ、学生自身が開発途上国における環境問題の実情と原因を事例に基づき理解し、環境問題が社会に与える影響を理解すると共に、持続可能な開発の観点から、トレードオフの関係にあるとされる環境と開発のバランスのあり方を考えることを目的とする。
科目の到達目標 (理解のレベル)	環境・開発問題においては何が正しいのか、どのようなアプローチが正しいのかなどについて「絶対的な正解」などなく、個々の国や地域、アクターごとに異なる見解・立場が存在する。こうした「多様性」に対する理解・姿勢を養うと共に、この理解をもとに諸問題に関する現状や課題を様々な視点から吟味した上で、「持続可能な開発」のあり方について学生が自分なりの視点で考え、判断出来るようになることがこの科目の到達目標である。
授業形態	講義
授業方法	授業は対面式の講義形式を基本として実施する(必要に応じオンライン式で講義を実施する場合は遠隔会議システム(Zoom)を活用する)。各回の資料配布及び課題提出は授業支援システム(manaba)を活用する。講義の際に課す課題については、提出された課題に基づき講義を行う場合もあればその日の講義内容をさらに深めるためのものもあることから、毎回の課題については決められた期限までに必ず提出すること(期限後の提出は認めない)。 詳細については、受講生の学習環境を勘案したうえで初回講義の際に指示する。
授業計画	<p>【第1回】イントロダクション 内容:この講義の進め方についての説明。担当教員の自己紹介。 「世界がもし100人の村だったら」を題材に、世界の様々な面に関する現状について学ぶ。</p> <p>【第2回】タンザニアの生活(1):アフリカ・タンザニアの今 内容:最貧国(LDC)の一つであるタンザニアを事例とし、その多民族性、政治、貧困、教育などの現状・抱えている課題などについて学ぶ。</p> <p>【第3回】タンザニアの生活(2):タンザニアの観光・環境開発 内容:タンザニアの観光・環境に焦点を当て、その現状・課題、解決策の一つとしての開発のあり方などについて学ぶ。</p> <p>【第4回】タンザニアの生活(3):タンザニアの村落社会 内容:タンザニアの村落に焦点を当て、その現状・課題、格差問題などについて学ぶ。</p> <p>【第5回】気候変動問題 内容:温室効果ガス排出削減の国際枠組みである京都議定書、パリ協定の特徴や課題、気候変動問題に対する世界各国の取り組みの現状などについて最新のトピックスも含めて学ぶ。</p> <p>【第6回】エネルギー問題(1):原子力エネルギー 内容:原子力エネルギーに焦点を当て、その特徴・課題、日本における再稼働の現状などについて最新のトピックスも含めて学ぶ。</p> <p>【第7回】エネルギー問題(2):RPS法とFIT制度 内容:再生可能エネルギー推進に向けて日本政府が推進してきたRPS法やFIT制度に特に焦点を当てて、制定された経緯、取り組みの成果、課題について最新のトピックスも含めて学ぶ。</p> <p>【第8回】森林減少問題 内容:森林減少問題について、多面的機能を有する資源としての森林の特徴、植林の難しさなどを含めて学ぶ。</p> <p>【第9回】企業の社会的責任(CSR) 内容:現代の必須ワードでもある「企業の社会的責任(CSR)」に焦点を当て、その現状・課題などについて学ぶ。</p> <p>【第10回】フェア・トレード 内容:現代の必須ワードでもある「フェア・トレード」に焦点を当て、その現状・課題などについて学ぶ。</p> <p>【第11回】廃棄物処理問題 内容:廃棄物処理問題について、特にプラスチックゴミ問題、海洋ゴミ問題などに焦点を当てて、その現状・課題などについて学ぶ。</p> <p>【第12回】世界遺産とツーリズム 内容:世界遺産を事例とし、観光が環境・資源に与える影響について、その現状・課題などについて学ぶ。</p> <p>【第13回】開発途上国における環境・開発問題:環境と開発のトレードオフ 内容:講義のまとめとして、特に持続可能な開発の観点から、開発途上国における環境と開発のトレードオフについて学び、このトピックスについて受講者全員でディスカッションを行う。</p> <p>※ただし、最新のトピックスについても適宜取り上げるため、講義の内容・順番が一部変更になる可能性がある。</p>

事前・事後学修	<p>講義でも取り上げるため、世界各国の環境と開発に関する最新のニュースを常にチェックし、理解するよう努めること。 提出された課題に基づき講義を行う場合には、事前学修として各自できちんと課題に取り組み、授業に臨むこと。その日の講義内容をさらに深めるための課題が課される場合には、事後学修としてその日の講義内容を改めてきちんと理解したうえで課題に取り組むこと。 いずれにしても、各回の学修を前提として講義が進むため、特に事後学修をしっかりと行い、前回の内容を理解したうえで翌週の講義に臨むこと。</p>
成績評価方法・基準	<p>目標「世界の多様性及び「環境と開発」に関する諸問題に対する知識の習得・理解」、「諸問題に対し自分なりの視点で考え、判断出来るような姿勢・能力の養成」 平常点30%、小レポート20%、期末課題(期末試験or期末レポート。現時点では未定)50%。 ただし、2/3以上の出席・課題の提出を単位認定の前提とする。また、期末課題への対応(期末試験の受験/期末レポートの提出)は単位の必須要件である。</p>
教科書・指定図書	<p>教科書は特に指定せず、毎回授業支援システム(manaba)を通じ資料の配布を行う予定。 各回の講義の際に適宜指示する。</p>
履修上の留意点	<p>初回講義の際に説明するので、必ず出席すること。 なお、この講義概要/シラバスの内容は暫定的なものであり、講義を進めながら修正が行われ、詳細が示されるので、その指示に従うこと。</p>
更新日	2022/3/16

開設	国際関係学部国際関係学科
科目ナンバー	IF313
講義コード	11E001600
講義名	比較文化論
担当者名	角田 宇子
開講情報	
単位数	2
受講可能学部	B/E/L/I/C/U
備考	実務経験のある教員による授業科目である。

科目の趣旨	この講義では、文化人類学の概念を用いて、現代社会の諸現象を読み解くことを目的とする。この「現代の民族誌」は従来文化人類学ではあまり取り上げられてこなかった研究分野であるが、現在我々をとりまく国際社会で注目を集め、今後ますます重要になる課題群であるといえよう。
授業の内容	人類はその歴史の中で、狩猟採集、牧畜、農耕という伝統的な生業様式を編み出すことで、地球上の様々な場所で生存することを可能としてきた。本講義ではまず、多様な自然環境への人間の適応手段として、狩猟採集民、牧畜民、農耕民の伝統的生業様式を紹介する。その上で、これらの社会が近年世界システムや国家のシステムに編入されることにより、本来その地域の自然環境に最も適応していたこれらの人々の生業が成り立たなくなり、国家の中での周辺化と貧困化を伴う社会変容が生じていることを説明する。 次に現代のグローバルな国際社会において重要な課題の一つといえる先進国と開発途上国の格差（南北格差）と開発途上国が抱える低開発に目を向ける。これらの問題には、国、地域ごとに様々な要因が存在しているが、本講義ではその中の歴史的要因に焦点を当て、文化人類学の視点を用いて、非西洋社会から見た歴史を辿りながら解説していく。講義ではまず非西洋社会が西洋社会に植民地化され、世界システムに編入されることで、経済・政治・社会・文化的に大きく変容し、自律性を失い、西洋社会に従属化される過程を見ていく。さらに、これらの社会は独立後は多民族を擁したまま国民国家の形成を目指す。冷戦終結後、先住民族問題、エスニシティ問題、民族紛争など、元々国家が抱えていた矛盾が表面化し、国家が分裂し細分化されるような様々なゆらぎが内部で生じていることを解説する。一方で現代社会において国境を越えて経済、政治、文化が一体化する現象であるグローバル化にも目を向け、グローバル化が社会にもたらす影響について見ていく。これら現代社会の諸現象に対しては、経済学、政治学、社会学など様々なディシプリンによりアプローチが可能であるが、ここでは文化人類学のアプローチによってこれらの課題を捉えていく。
科目の到達目標 (理解のレベル)	上記の現代社会の諸現象を文化人類学の視点から理解することを目指す。またそれを通じて、現代の国際社会における先進国と開発途上国の格差、開発途上国の低開発が生じる歴史的要因について理解することを目指す。
授業形態	講義
授業方法	対面式授業を行う。 manaba、Responを使用する。適宜DVD視聴を行う。 授業支援システム(manaba)で事前に配布された資料を読んだ後、授業の前半に各自課題に取り組み、また質問をResponで提出する。(資料の内容に関して詳しく、わかりやすく解説(講義)してほしい箇所、用語の意味・解説などどんな質問でもよい。)授業の後半では、資料の解説及び質問への回答を対面式授業で行う。 第1回から第3回まで、及び第12回の講義では講義時間内にDVD(50分)を視聴する予定である。その他の回でも適宜DVDを視聴する。質問を提出でき、また課題に十分解答できるよう、事前に配布された資料をよく学習した上で授業に臨むこと。 なお、各回の授業方法は以下のとおりを予定している。 ①受講生は事前に配布された資料を読み、課題の準備をしておく。 ②授業開始後その日の授業のテーマについてまず自分なりに考えるために、Responで導入クイズに解答する。(10分) ③受講生は3回の授業セッションにおいて、資料を学習し、課題に取り組み。質問があればResponで提出する。(35分) ④対面式授業でスライド資料の解説及び質問への回答を行う。(60分) ⑤受講生は課題に解答し、manabaを通じて提出する。(当日中) ⑥授業終了後、授業で分からなかったことと授業の感想を書いてResponで提出する。(当日中) ⑦翌日0:00からmanabaのコースコンテンツで課題の解説が公開されるので、自分の解答と照らし、自分の解答が適切であるか、確認する。
授業計画	第1回 自然環境と生業の多様性(狩猟採集民) 内容:人間の生業様式、狩猟採集民の生業様式、狩猟採集民の社会(平等主義)、DVD視聴(狩猟採集民バカ・50分) 第2回 自然環境と生業の多様性(狩猟採集民の社会変容) 内容:狩猟採集民の事例(サン):サンが生業様式、サンが社会制度、近代化による狩猟採集民の社会変容、DVD視聴(狩猟採集民の社会変容サン・50分) 第3回 自然環境と生業の多様性(牧畜民) 内容:牧畜民の生業様式、牧畜民の社会制度、近代化による牧畜民の社会変容、DVD視聴(牧畜民レンディーレ・50分) 第4回 自然環境と生業の多様性(農耕民・焼畑移動農耕民) 内容:農耕文化の類型、焼畑移動農耕民の生業様式、焼畑移動農耕民テンポ、DVD視聴(農耕民コンソ・25分) 第5回 国家の成立とゆらぎ(植民地主義の成立と展開) 内容:西洋における大航海時代と産業革命、植民地主義の成立、植民地主義の拡大、DVD視聴(大航海時代の残照スリランカ・ゴール12分) 第6回 国家の成立とゆらぎ(植民地主義の影響) 内容:植民地主義の伝統社会への影響、民族独立運動と植民地主義の終焉、人類学者と植民地主義との関わり 第7回 国家の成立とゆらぎ(植民地主義の現代の社会への影響・世界システム論) 内容:世界システム論とは、資本主義の世界化、世界システムへの接合(経済的変化、社会・文化的変化)、世界システムの接合の事例 第8回 国家の成立とゆらぎ(植民地主義の現代の社会への影響・オリエンタリズム、ポスト・コロニアリズム) 内容:オリエンタリズム、新植民地主義、ポスト・コロニアリズムの状況 第9回 国家の成立とゆらぎ(国民国家) 内容:国民国家とは、ナショナリズム、国民統合の手段としての国民文化の形成、国民国家形成の事例・インドネシア 第10回 国家の成立とゆらぎ(先住民族問題・先住民族運動) 内容:先住民族とは、先住民族運動(アメリカ先住民族の事例)、世界の先住民族復権の動向、先住権

	<p>第11回 国家の成立とゆらぎ(エスニシティ問題) 内容:エスニシティ現象の興隆、エスニシティ概念の理論(実体論、用具理論・状況理論、エスニック・バウンダリー理論)、エスニシティの政治性</p> <p>第12回 国家の成立とゆらぎ(民族紛争) 内容:民族紛争発生要因、民族制支配(エスノクラシー)、民族制支配と植民地統治、民族紛争の事例・ルワンダ、DVD視聴(ルワンダ平和構築・50分)</p> <p>第13回 国家の成立とゆらぎ(グローバリゼーション) 内容:グローバリゼーションとは、越境者の増大、文化のグローバル化、グローバリゼーションの肯定論・否定論</p>
事前・事後学修	<p>事前学修 ①授業支援システム(manaba)で事前に配布された資料を読んでおく。 ②資料を読んだうえで課題の作成準備、質問の準備を行う。</p> <p>事後学修 ③課題に解答し、manabaを通じて提出する。(当日中) ④授業終了後、授業で分からなかったこと(授業への質問)と授業の感想をResponを通じて提出する。(当日中) ⑤翌日0:00からmanabaのコースコンテンツで公開される課題の解説を見て、自分の解答が適切であるか、確認する。 ⑥授業で提出した課題について課題の解説に基づき復習し、最終レポートへの準備を行う。</p>
成績評価方法・基準	毎回の課題:80%、最終レポート:20%
教科書・指定図書	<p>教科書:江洲一公『文化人類学—伝統と現代』放送大学教育振興会 その他の授業資料は授業支援システムを通じて指示、または配布する。</p> <p>指定図書:特になし。</p> <p>主要参考図書: ① 米山俊直編『現代人類学を学ぶ人のために』世界思想社。 ② 米山俊直・谷康編『文化人類学を学ぶ人のために』世界思想社。</p>
履修上の留意点	「文化人類学入門」などを通じて、人間の文化を比較・研究する上での基礎概念を理解していることが望ましいが、これらの科目を履修していなくても受講は可能である。
更新日	2022/3/16